

『台湾民間文学集』 故事篇にみる 1930 年代台湾新知識人の文化創造

豊田 周子

はじめに

第1節 編者・李献璋について

第2節 『民文集』誕生の背景

第3節 『民文集』をめぐる同時代評価

第4節 故事分類からみる台湾の文化創造

おわりに

(要約)

1936年に李献璋によって編まれた『台湾民間文学集』は、台湾の民間に流布する口承文芸が記録された文学集である。同書は、30年代の郷土文学論争や台湾白話文論争の結晶と目されて来たが、内容に関わる具体的な研究は、近年まで十分に進められてこなかった。その理由の一つとして、採集記録方法が統一されたものでなかったため、記録された内容の真偽をめぐり議論が生じ、学術的資料としての価値が定まらないことが挙げられよう。しかし30年代の台湾新知識人には、忠実な記録ではなくとも、民間伝承を記録・再編し世に問う切迫した事情があった。本稿では、この『台湾民間文学集』に収録された故事を分類検討することを通じて、台湾新知識人による新文化創造の一側面に迫りたい。

はじめに

1936年12月、李献璋(1914-1999)の編集による『台湾民間文学集』¹〔以下、『民文集』と略す。〕が出版された。同書は、台湾の民間に流布する民謡・童謡・なぞなぞを集めた歌謡篇と、各地の口承伝説を採録した故事篇の二部構成からなる文学集である。収録作品はいずれも、台湾語白話文〔以下、台湾話文と表す。〕により書かれ、当時の台湾新知識人が考える民間／民衆像が記録された史料的価値の高い資料と看做すことができる。

日本統治下の台湾では20年代以来、台湾新知識人によって、民衆を啓蒙する道具として文学の効能が盛んに議論された。30年代に入ると、20年代に提唱された中国語白話文推進運動に代わり、台湾人自身の言葉である台湾語(閩南語)の書面語化を推進しようという意識が高まり、台湾話文の樹立や郷土文学の建設が提唱され議論が戦わされることとなった²。『民文集』は文学史上、これら一連の論争の結晶と目されてきた³。しかしながら90年代に入るまで、同書に特化した研究は、胡萬川氏の「頼和先生及李献璋先生等民間文学觀念及工作之探索」(1994年)⁴を除いて、ほとんど進められてこなかった。その立ち遅れの理由として、(1)『民文集』の編者である李献璋の経歴が明確にされてこなかったこと、(2)記録方法をめぐる史料的価値にかかわる問題、(3)民間文学研究自体が文学研究の領域において重きを置かれてこなかった等々の事柄が考えられる。しかし90年代頃から、台湾では民間文学に関するシンポジウムが開催され⁵、近年は、王美恵氏の『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践—以《台湾民間文学集》為考察中心』

(2007年)⁶や、蔡惠如氏の『日治時期台湾民間文学觀念與工作之研究』(2008年)⁷といった優れた学位論文が提出される等、民間文学研究は文学研究の一領域としても着実に認知されつつある。これらの先行研究では、『民文集』の文学史上における位置付けや、『民文集』故事篇の採録者と故事との関係性が検討され、日本統治期の台湾民間文学全体を射程範囲とした考察も行われている。

一方、『民文集』収録故事に限って言えば、30年代の台湾新知識人による故事採集活動やその表記方法と、新文化創造の方向性については更なる検討の余地を残しているだろう。そこで、本稿ではまず、先行研究を踏まえながら『民文集』故事篇の編集方針と同時代評価を整理する。次に、故事をストーリーに基づき類型分類することで、「民間文学」という形態を通じて行われた新文化創造の方向性を探りたい。民衆の思想・精神が豊かに織り込まれた口承文学が、如何に採集され記録されているかを検討することは、30年代台湾新知識人の民衆／民間に対する認識のあり方を窺う一つの方法でもあるだろう。

第1節 編者・李献璋について

具体的な議論に入る前に、未詳の点が多かった『民文集』の編者李献璋の足跡について、夫人である李楊玲秋氏の著書『思い出すままに』(私家版：泰山文物社、2003年⁸)に沿うかたちで、簡単に述べてみたい⁹。

李献璋は、1914年に日本の統治下にあった台湾の桃園大溪に生まれ、儒者であった父李希唐によって、幼少より漢詩や書道の手ほどきを受けて育った。公学校入学ののち、そのまま高等科へ進学したが、11歳の頃に、両親の離婚、父の他界というように家庭環境が大きく変化したため、叔父の家に引き取られて少年時代を過ごすこととなった。そのような青春期に、『キング』や『中央公論』といった雑誌、また著名な文豪の作品が掲載された書籍を大量に読破したという。17歳の頃、叔父の勧めもあって、廈門の集美中学に入学するが、病気のために同校の卒業を前に帰宅することとなった。

その後、台南の『東亜新報』¹⁰記者を経て、大東信託株式会社の第一秘書となり、本社(台中)と支社(台北)を往来する生活を送った。この時期に前後して、台湾文芸協会や台湾文芸聯盟に参加し、台湾語表記問題・歌謡・ことわざ・なぞなぞ・故事・流行歌に関する論述や採集した歌謡を、『台湾新民報』『台湾新聞』『東亜新報』『台南新報』といった新聞や、『南音』『革新』『第一線』『台湾文芸』などの雑誌に約20篇発表した。34年には、大溪革新会を立ち上げ、雑誌『革新』¹¹を出版するが、同誌は検閲によって発禁となった。こうした文学的活動を通じて、36年、弱冠22歳で『民文集』を編集刊行する¹²。一方、生活の糧を得るために、『日語自習読本』(38年6月、台北対訳出版社)や、『日台対訳実用会話』(39年10月、同上出版社)も出版した。

38年10月、軍直属の通訳兼事務手伝として軍夫に徴用され、再び大陸に赴くこととなった。帰台後、40年26歳の時に、下宿先¹³の楊家の令嬢である楊玲秋氏と結婚。同時期に、友人の金関丈夫に相談のすえ早稲田大学への留学を決意し、離台の「置き土産」として『台湾小説選』を

編集するが、同書も印刷途中で発禁となった。

43 年 7 月末、早稲田大学文学部東洋哲学科¹⁴に「媽祖の研究」と題する卒業論文を提出すると、そのまま東京で終戦を迎えた。その後、渡華を予定していたが、政局の変化により東京に留まることとなった。戦後の東京において困窮した生活が続くなか、多くの在日華僑が私利に走る様を目の当たりにし、同胞の文化教養のレベルを向上させようと、生活文化雑誌『華僑生活』¹⁵を刊行。また、『東京中華日報』¹⁶の編集長に就任するが、闇市における在日華僑と警察とが衝突した「渋谷事件」¹⁷取材したことにより、大使館から干渉を受け、辞職に追い込まれる。この件を境に、52 年 48 歳の頃から再び研究生活に戻り、60 年 54 歳の時に、『媽祖研究』と題する学位論文を国学院大学に提出し、初の旧制外国籍博士となった。以降、長年の研究を『媽祖信仰の研究』や『長崎唐人の研究』といった大著に結実させるなど、1999 年に逝去するまで、学术界（主として東洋史学の分野）において活躍し続けた。

第 2 節 『民文集』 誕生の背景

では次に、『民文集』誕生の時代背景について概括したい¹⁸。

(1) 社会運動と文芸雑誌

1920 年代後半から 30 年にかけての台湾は、文化運動や農民運動をはじめとして、あらゆる分野において社会運動の組織化が進められ、台湾近代史上、社会運動が最も隆盛を極めた時期と言われている。台湾島内では農民による小作争議や、労働運動が頻発したほか、台湾文化協会内に異なる立場が生じ、左派により台湾共産党（28 年）が、右派により台湾地方自治連盟（30 年）が結成された。しかし、これらの社会運動に対して当局は弾圧を強化し、台湾民衆党に解散命令が出される（31 年）と、台湾共産党やプロレタリア運動は壊滅状態に陥り、付随して生まれた左翼系の雑誌も次々と停刊に追い込まれてゆく。こうした弾圧の嵐が吹き荒れるなかで、台湾民衆党の流れを汲む台湾地方自治連盟から、文芸組織「南音社」が結成（31 年）され、『南音』が創刊（32 年）された。同誌には「台湾話文討論欄」「台湾話文嘗試欄」など台湾話文の実践の場が設けられたり、文化啓蒙運動や文芸大衆化が模索されるなど、文芸誌として広く一般に読まれる工夫がこらされた。また、「台湾文芸協会」が発足（於台北、33 年）すると、台湾話文運動派や中国語白話文派、またプロレタリア文学派が結集し、機関誌『先発部隊』が創刊（34 年）された。この雑誌はその後、『第一線』と改題（35 年）するが、ここにおいて「台湾民間故事特輯」が生まれ、台湾の民間伝説や故事が採集掲載された。この時の成果の一部が、李献璋編『民文集』（36 年）として受け継がれることとなった。

(2) 社会運動と文字表記

30 年代の台湾における各種の社会運動においては、知識人だけでなく、広く農民や労働者が動員されることとなった。しかし民衆をとりこんだ社会運動を展開するためには、彼らに書記言

語を普及させる必要があった。そのため、民衆の言葉の書面語化（台湾話文の樹立）が提唱され、またそれをういた郷土文学建設の意識が芽生えることとなる。

台湾話文の表記方法については、蔡培火を代表とするローマ字表記派のほか、連雅堂、黄純青、黄石輝、郭秋生らに代表される漢字表記派があった。黄純青、郭秋生らは、中国語白話文は文言文に代わることができても台湾話文には代替不可能なこと、台湾話文の表記は漢字を用いるべきこと、現在慣用されている表記はある程度の安定性があると主張した（31年）。また郭は、台湾話文建設の基礎作業として、歌謡（特に当時流行していた「民歌」）の影響力や、各地方性を反映する特徴に着目して、その整理を提案した（31年）。さらに、先述の雑誌『南音』の「台湾話文討論欄」では、負人「台湾話文雑駁」、頼和「台湾話文的新字問題」、黄純青・李猷璋「新字問題」、黄石輝「答負人」、郭秋生「再聴阮一回呼声」「生活改造的武器」が掲載されるなど、台湾語の書面語化が真剣に討論された¹⁹。「台湾話文欄嘗試」では、郭秋生によって採集された童謡・歌・曲・なぞなどが掲載され、李猷璋によって諺の台湾話文表記が試みられた。

こうした動きと並行して、30年代中後期まで、台湾の特殊性の上に如何に郷土文学を創造し、新文学を大衆化させるかといった問題が盛んに議論された。そこには、大きく言って、反封建・反植民のために民衆が自らの言葉を持つべきことを主張する「本土化」の立場と、近代国家形成に不可欠な「国民」となるため「国語」の必要を主張する「大衆化」の立場が現れた²⁰。前者からは、地方には地方の言葉があり、文学が民衆に感動をもたらすためには日常語である台湾語を用いるべきこと、台湾語の文法や文字は中国語白話文を応用して造ればよく、郷土文学は写実主義の道を歩まなくてはならないとする見解²¹が出され、漢文の廃止や、大衆教育を目的として、文盲をなくすための台湾語の言文一致の必要や、民衆の心をつかむ郷土文学の建設が主張された²²。一方、後者からは、大陸の文芸大衆化論争に影響を受けた中国語白話文の普及が叫ばれ、台湾は民族文化という点で大陸の一部であり、新たに特殊な郷土文学を樹立する必要はないとする見解が提出された²³。

これらの一連の論争を踏まえた上で、表記問題を実践したのが、上述の「民間故事特集」であり、その集大成と言うべきものが『民文集』であった。

第3節 『民文集』をめぐる同時代評価

以上の経緯のもと世に問われた『民文集』は、当時の人々にどのように捉えられたのだろうか。本節では、当時の民間文学に対する認識について検討したい。

台湾における民間文学採集活動は、そもそも領台初期に日本人によって始められたものだった²⁴。大陸では20年代に、周作人や顧頡剛らによって国故整理運動が展開されるが、その影響下に、30年代になって台湾知識人自身による台湾の民間文学採集整理が始められることとなる²⁵。当時における台湾新知識人の民間文学保存の意識は、醒民「整理「歌謡」的一个提議」（31年）²⁶から窺える。その主張は基本的に、大陸の民間故事整理論争や民間故事編纂の概念を引き写したものと考えられる。兩岸の事業の相違は、大陸では王朝体制瓦解後、新知識人は国故整理運動

への関与を通じて自らの社会的立場を民（衆）との関係性から獲得しようとした²⁷のに対して、台湾では異民族統治下の植民地という前提のもと、新知識人は民衆の代弁者あるいは啓蒙者として、民族文化保存と新文化再創造のために採録事業に携わったという点に見出せるものと思う。

さてここで、台湾知識人による民間文学採集が行われた理由には、台湾が一貫して持つ民衆文化を如何に学術的に保存するかという問題と、更にもう一つ、採集した民間文学を足がかりとして台湾の新文化を如何に創造するかという喫緊の問題があったことを見逃すべきではないだろう。つまり、『民文集』 故事篇の時代の意義に迫るには、当時の台湾知識人たちが民間文学をどのように捉え、民間故事という形態を通じて台湾の歴史を如何に記述し、台湾文化の創造をどう行おうとしたかといった諸点に検討を加えるべきと考えるのである。

そこで以下では、(1) 30 年代台湾新知識人の民間文学全般に対する認識、(2) 『民文集』の編纂意図、(3) 『民文集』への評価の順に整理してみたい。

(1) 30 年代台湾新知識人の民間文学全般に対する認識

まず、「台湾民間故事特集」が組まれた台湾文芸協会の機関誌『第一線』（1935 年 1 月）を中心として、民間文学全般に対する当時の認識を概観してみよう。

雑誌『第一線』の編集後記には、台湾の民間文学だけが祖先の純粋な遺産であり、文学的な保存のみならず、民俗学的な整理とそれに従事する専門的集団が必要と記されている。この『第一線』で、黄得時は、民間の文学を保存すべきとの見解を示している。黄は、歌謡に比して故事採集の数が少ない事実や、「伝説や神話は理知的な生活に属するもの」であり、故事は大人を魅了するだけでなく子どもの童話の材料とされて来たとの側面から、他のジャンルの文学との密接な関係も指摘している²⁸。また、林克夫（HT 生）は、伝説のなかの古代の文化生活を近代の自然科学によって検証することや、無名の人間の故事を発掘する必要があると述べる。そして、当時の客観的現実を照らして取捨選択や考証を行い、新写実主義による芸術的概念化の手法によって表現すべきとする²⁹。ここには、民間文学を文化の進歩に従った表現形態で描写すべきとする見解が見て取れよう。

この「台湾民間故事特集」が組まれた後、夜郎は、それらの掲載故事を指して、本来の口伝の文学にも劣り、迷信を助長すると激しく批判した³⁰。さらに、民間文学の価値問題について、民俗学の立場をとる李献璋・廖漢臣と、文学的立場をとる張深切との間で、『台湾新民報』『台湾新聞』『東亜新報』上で数ヶ月に及ぶ議論が展開された³¹。また同時期に、劉捷が『台湾文芸』において、台湾人の感情、意志、思想を組織する芸術創造のために、郷土台湾を再確認し、過去の文化的遺産を摂取すべきとの考えから、民間文学整理の必要性を力説した。劉は、民間文学は、「過去に発表された先人の感情、思索、意志などイデオロギーの表現」であり、また、文字表現が不十分な過去の文学であり、自然で粗雑で幼稚な群衆（被支配者階級）の文学でもあるが、現在社会生活に有用ではあっても、芸術としては高く評価できない³²との見解も示している。

このように、30 年代新知識人は民間文学全般に対して、(a) 文化保存の立場を主張し、(b) その価値については、民衆の精神性が表れたもの、あるいは他の文学ジャンルへの影響力がある

という肯定的意見や、台湾文化協会の民衆啓蒙のスローガン「迷信打破」に通じる否定的意見を示したのだった。さらに、現在の生活に益するが芸術性は高くないとの見解もみられた。また、(c)採集記録方法については、科学的考証を経た新たな創作方法で描くべきという論を展開する者もいた。(d)定義をめぐっては、民俗学の研究対象かあるいは文学かという議論があったことも確かめられる。

民間文学に対するこれらの様々な見解のもと、36年に、次に窺う『民文集』が出版されたのである。

(2) 『民文集』の編纂意図

編者・李献璋は『民文集』序において、「台湾民間文学は原始の歌謡・伝説として、我らの文学史においてもっともすばらしい一角を占め」、「世界各国」の民間文学と遜色ないと主張し、こうした「特殊な民間文学」を「民衆が共有してきた感情」として、人々の「考え方や行動の無形の支配者」とであると位置づける。また、「民衆は先人の遺産を引き継ぐ」が、そこに「必ず地方的色彩や時代の思潮を重ねて完全に自らの文学にする」ため、『民文集』収録故事は台湾独特のものを選出したと強調する。さらに、「方言研究熱」の高まり³³に併せて、「記録する文字の選定に留意した」³⁴とも述べている。

こうした李の発言には、台湾の民間文学が、一民族あるいは一国家の民間文学に匹敵する価値があり、長い間民衆が共有してきた思想やしきたりとして機能しながら、時代や土地柄に影響を受け独特のものに変容してゆくという認識のあり方が見て取れる。台湾語を意識的に使用したと述べる点において、李が『民文集』の編集にあたり大陸の影響を前提としながら、台湾独自の文化創造を意識していることが確かめられよう³⁵。

また、頼和は、民間文学整理活動の当初から、台湾人の子どもが日本の童謡を多く歌っている実情に警鐘を鳴らし、民間故事と民謡の整理は緊急の課題だと訴えていた³⁶。『民文集』序では「一部の士君子達により排斥された民間の故事と歌謡」がなお民間に伝承されていると述べ、どの故事も歌謡も、当時の民情、風俗、政治、制度を反映し、民衆の真実の思想や感情が表されており、民俗学、文学、言語学的にみても保存の価値があるとす。さらに、士大夫層から周縁に追いやられた民間文化にこそ民衆の真実を表した価値があることや、民間文学を保存する重要性とそれらを歪曲して伝承する危険性にも触れている。ここには民間の財産として民間文学を忠実に記録保存しようとする意識や、民衆の文化を高く評価する姿勢が看取されよう。

では、こうした編者らの保存や台湾文化創造の願いが込められた『民文集』は、同時代の台湾知識人にどのように評されたのだろうか。

(3) 『民文集』への評価³⁷

『民文集』序において頼和は、編纂に対して「つまらない」あるいは「迷信を助長する」という議論があったことを記している。このことは先述の、民間文学に対する一部の台湾新知識人の認識とも合致するが、当時の言語改革や郷土文学には、民衆の日常生活に根ざした文学創作を目

指しながら、民衆を前近代的啓蒙の対象と看做す傾向が根強く残っていたことを物語っているだろう。

また、楊雲萍は、民間文学を「文学」の最高位に置く考え方に反対し、民間文学には「民間文学」としての価値があるのであって、「その価値の限界を理解する」ことが必要だと述べた。ここには、文学には雅と俗の二通りあること、つまり俗に分類される民間文学には、深い思想性といった点で限界があるとの理解が窺われる³⁸。そして、採集者のほぼ全員が、記録の方法を知らずに「創作」し、「最も大事な素朴さが失われて居る」とも批判し³⁹、学術的保存を重視する立場を示した。葉榮鍾は、台湾話文表記の難しさに言及しながら、『民文集』が多くの豊かな資料を集めて文字化を实践したことに高い評価を与えている。その一方で、採集された故事篇の描写は、技巧に流れる嫌いがあり、故事本来の持ち味が損なわれているとの批判的見解も示している⁴⁰。楊達は、『文学案内』において、台湾文芸協会には進歩的立場に立ちプロレタリア文学に関心を寄せる会員が多く、大衆化問題と関連して民間文学の研究を盛んに行っていること、その機関誌『第一線』が民間故事を積極的に採録し、会員の李猷璋が『民文集』を出版したことを紹介⁴¹している。ここには、文芸大衆化の問題に通じる左翼文学の立場から『民文集』の意義が見出されているだろう。

以上見て来た『民文集』に対する編者の意図と批評をまとめると、まず、編者の立場からは、口承文芸を記録保存する重要性が述べられ、台湾独自の故事や表記へのこだわりを通じて、台湾の新文化創造が強く意識されていることが分かる。次に、評者からは、『民文集』は文学の最高位には置けないとする見解や、『民文集』が「迷信」を助長するという全面的な否定意見、さらに、左翼文学の立場から「文芸大衆化」に役立つとの見方が示されたのだった。採集記録方法については、執筆者の方針も不統一であり、評者からは、採集方法に学術的問題あり、故事の原型が損なわれているといった厳しい批判がなされた。これらを、先の 30 年代新知識人による民間文学全般に対する見解と比較すると、文化保存や価値をめぐる賛否については、ほぼ同様の論調であることが分かる。一方、記録方法については、なお模索の段階にあり、採集者の取るべきスタンスや文字表記という具体的な問題が俎上に上っていたことが確かめられる⁴²。

こうした 30 年代台湾新知識人の認識の種々相を見た上で、意義深く思われるのは、日本語／日本文化の台頭に伴う台湾語／台湾文化への抑圧が進行しつつあったこの時期（35-36 年）に、異なる立場の台湾知識人が、新しい台湾文化の創造という共通の目的にむかって議論を戦わせ、『民文集』を編集するための共同体を形成していったことである。これに加えて注意したいのが、『民文集』刊行の直前にあたる 1935 年の 8 月から 10 月にかけて、植民者である日本人の東方孝義が「台湾習俗」と題し、『台湾時報』に台湾の民間故事を連載していることである。この連載には、「台湾人の文学」という項目に『民文集』収録故事と重なる故事の採録が認められる。『民文集』序で李猷璋は、台湾人自らが台湾の民間文化採録事業に率先して携わるべきことを強調しているが、日本人の採録事業に対し危機感を募らせていたという可能性も否定できまい。

それでは、正面からの体制批判や、大陸との結びつきを表すことが困難な状況下⁴³に、台湾新知識人は民間故事編集にどのような可能性を見たのだろうか。次節では、『民文集』収録故事の分類検討を通じて、彼らの文化創造の方向性を探りたい。

第4節 故事分類からみる台湾の文化創造

(1) カテゴリー分類

先に、本節で行う故事分類は既存の学術的分類基準に拠る分類ではないことを断っておきたい。その理由は、『民文集』故事篇は、台湾の民間故事全般を網羅的に採集した記録媒体ではなく、収録故事はあくまで恣意的に選出されており、記録においても採集者の介入があったと考えられるからである⁴⁴。本稿の趣旨は、『民文集』に込められた編者や執筆者の意識の種々相を読み取ることにある。よって、分類に際しては『民文集』収録故事23篇について、ストーリーの傾向に拠り分類することとしたい⁴⁵。ここでは、以下に示した〔表：『台湾民間文学集』故事篇の類型分類一覧〕のように、「a) 台湾の歴史上の人物」「b) 台湾の義人」「c) 台湾の風俗・信仰」「d) 台湾人の特性」と四つのカテゴリーに大別した。(なお、表中、故事題目欄に【 】で示した数字は『民文集』に収録された順番を表し、掲載誌欄の『 』は初出の雑誌・新聞を表している

表：『台湾民間文学集』故事篇の類型分類一覧 (筆者作成)

分類	故事題目	伝承地域 ⁴⁷	故事の内的時間 ⁴⁸	記録者	掲載誌
a) 歴史上の人物 - 1) - 2) - 3) - 4) - 5)	鴨母王【1】 林大乾兄妹【3】 林道乾與十八携籃【4】 鄭國姓打台灣【9】 國姓爺北征中的傳説【10】	赤崁 鳳山 打鼓 打鼓 台北	清・1720年代 明・1560年代 明・1560年代 明・1659～1662年 明・1650～60年代	朱峰(莊松林) 黄石輝 夜潮 夜潮 黃得時	『台湾新文学』 『第一線』 ※
b) 台湾の義人 - 1) - 2) - 3) - 4) - 5) - 6)	石龜與十八義士【5】 善訟的人的故事【12】 汪師爺造深圳頭【19】 賣鹽順仔【21】 郭公侯抗租【22】 壽至公堂【23】	諸羅 彰化 彰化 赤崁 赤崁 彰化	清・1780年代 清代 清・1850年代 清・1850年代 清・1840年代 清・1860年代?	李猷璋 懶雲(頼和) 病夫(黃朝東) 朱峰(莊松林) 朱峰(莊松林) 楊守愚	※ 『台湾文芸』
c) 台湾風俗・信仰 - 1) - 2) - 3) - 4) - 5) - 6)	美人照鏡【2】 林半仙【6】 葫蘆墩【11】 媽祖的廢親【13】 過年緣起【18】 林投姉【20】	彰化 鳳山 豊原 諸羅 大料崁 赤崁	清・1700年代? 清代	楊守愚 李猷璋 林越峯 朱点人 李猷璋 朱峰(莊松林)	※ 『第一線』※
d) 台湾人の特性 - 1) - 2) - 3) - 4) - 5) - 6)	一日平海山【7】 無錢打和尚【8】 憨光義【14】 張得寶的到富奇談【15】 邱妄舍【16】 陳大鱧【17】	諸羅 笨港 鹿港 艋舺 全島 大料崁	清・1800年代 清・1850年代	李猷璋 蔡愁洞 一吼(周定山) 廖毓文 李猷璋ほか ⁴⁹ 王詩琅	『第一線』※ 『第一線』※ 『第一線』 『台湾新民報』

る⁴⁶。また、※印は、上述の東方孝義が『台湾時報』に発表した故事（1935年8月～10月にかけて掲載）のうち、『民文集』に収録されたものと同じ故事を表す。）

(a) 「台湾の歴史的人物」 一台湾を中心とした英雄像の形成

23篇の故事をそのストーリーに基づき分類した時、まず台湾の歴史的人物に関する故事が5篇確認できる。

(a-1) 「鴨母王」はすなわち朱一貴の話である。アヒル飼いの男が神通力を授かり、台湾の一大勢力家になってゆくが、明朝に懐柔された原住民（溝仔尾社）の罠にはまり、囚われる話である。鴨母王（朱一貴）が正史に記されてきたような賊としてではなく、台湾の英雄として描かれており、『民文集』故事篇の第一話にこの話が配置されたことの意味は大きいだろう⁵⁰。

(a-2) 「林大乾兄妹」および (a-3) 「林道乾與十八携籃」は、明代に福建省周辺を荒らしまわった海賊として知られる林大乾〔道乾〕の故事である。(a-2)は、明軍に追い詰められた林道乾が、足手まといになることを厭って自殺した妹を悼みながら、宝を隠し埋め、喝をさげび打狗山〔現・壽山〕を開き、木の葉を船にして海の彼方へ落ちのびてゆく話である。対して、(a-3) 「林道乾與十八携籃」は、主人公が仙人からもらった矢で皇帝を暗殺する計略に失敗した後、命よりも財宝を選択した妹を殺害して宝を埋め、不思議な力で山を開き落ちのびてゆく話。その後、死んだ妹の霊が台湾で宝をどのように守り、善良な人間に与えようとしたかという話が続く。このように、大陸と台湾との間を自在に行き来しながら活躍する英雄譚が創造され、英雄の宝と妹の話が付け加わることで物語の台湾化が顕著になっている。

(a-4) 「鄭國姓打台灣」ならびに (a-5) 「國姓爺北征中的傳説」は、台湾の各地に伝わる鄭成功の話である。(a-4)は、鄭成功が仙人から明朝復活に必要なだと告げられた三つの宝を得るため台湾へ赴き、不思議な靈力を授かって原住民平定を成し遂げるが、運が尽きて台南で明朝の復活を思いながら死にゆくという話である。ここでは「打鼓山」「阿里山」「萬年県」「安平」など台湾の地名があらわれ、それらと鄭成功との結びつきが示されている。(a-5) 「國姓爺北征中的傳説」は、『第一線』では二つの話のみが語られていたのに対し、『民文集』では台湾に遠征した鄭成功が、毒を吐くオウム石や、魚の妖精（悪霊）と戦って勝利をおさめた話が、「太平橋」「劍潭」など台湾各地の名所・地名の由来と関連付けて語られている⁵¹。さらに、『台湾志略』に記された「劍潭」の由来は、採集者の伝聞する内容と異なることも付記されている。

このように、カテゴリー (a) では、台湾に深く関わりのある歴史上の人物が、明・清王朝側の視点からではなく、「台湾を舞台にして英雄になってゆく」話として、また「台湾に複数話存在する」伝説として記されている。また、「鴨母王」や鄭成功の故事が「台湾の俗語や地名などと結びつく」ものとして記録されていることが分かる。

(b) 「台湾の義人」 一台湾という地域の独自性の強調

次に、抑圧された台湾の民衆を救うため、自らを犠牲にして立ち上がった人物の話が6篇収められている。採用された故事は大陸からきた救済者 (b-4) 「賣鹽順仔」、(b-6) 「壽至公堂」、あるいは台湾の役人 (b-5) 「郭公侯抗租」や、地主 (b-3) 「汪師爺造深圳頭」が地方の圧制に苦しむ民衆を救済するパターンになっているが、その一方で、台湾の民衆の中から立ち上がる無

名の人物について語られる (b-1) 「石龜與十八義士」、(b-2) 「善訟的人的故事」のような話もある。ここから、台湾外部や台湾の上層階級による台湾の救済という物語だけでなく、台湾の下層階級からあらわれた「地元の庶民の義人」を掘り起こし顕彰しようとする意識も看取できる。

(b-1) 「石龜與十八義士」は、巨大な亀の出現をおそれた民が石亀を造り祭った話からはじまる。後に、林爽文の乱で台南の府城が陥落しそうになるが、18人の無名の義士と政府の援軍のお陰で、人々は窮地を脱する。その後、乾隆帝は援軍の將軍だけをたたえる記念碑を石亀の上に建てる。しばらくしてから、ある一匹の犬が行方不明になっていた義士たちの亡骸をさがしあて、その犬とともに彼らを称える「十九公廟」も建てられたという話である。この話は林爽文の乱という歴史的事件よりも前からあった石亀の話や、歴史の背後に埋もれた無名の英雄に、語りの焦点が置かれている。さらに最後に、「それは現在の東門町憐保館の東側にある十九公廟である」とあるように、現在と関連を持たせ、今もその伝承が台湾には語り伝えられ、息づいていることが強調されているのである。

(b-2) 「善訟的人的故事」は、地域の勢力家の横暴を見かねた使用人の男が、人々のために役所に訴え続け、不思議な靈力を借りて、ついに中央政府への提訴を成功させるという話である⁵²。この故事の記録者である頼和の小説の特徴として、「今」と「昔」が対比的に述べられる叙述が指摘できるが⁵³、『民文集』収録のこの故事では、そうした方法が意識的に削除されていると分かる。ここには、日本植民者を想起させる「文明」への批判的叙述が回避されたという可能性と、耳で聞く民間故事を意識して、単純かつ抽象的な叙述形式が選ばれたという理由が考えられよう⁵⁴。その他に、『台湾文芸』に掲載された同故事の末尾に書かれていた、故事の事跡を記した石碑の存在に関する記述もなくなっている。これは悪役として故事に登場する人物が、事跡によって特定され、その末裔に被害が及ぶことを配慮し、物語の悪役を特定できる表現を極力避けたものと思われる。さらに、民衆の信仰の中心であり、世間公理の善悪を判断する場として観音亭(廟)が肯定的に描出されている点からは、台湾新知識人の民衆文化に対する理解のあり方が窺われる。また、主人公が原住民の末裔と設定されている点において、台湾新知識人の新文化像に別の可能性を見ることもできよう⁵⁵。

(b-3) 「汪師爺造深圳頭」は、水資源の乏しい村に用水路を引いた地方官・汪師爺の話である。田中庄には溪流を水源とする用水路があった。しかし洪水の度に決壊し、田畑が台無しになったため、水路の改修を求めて村人が役所に押し寄せた。そのため県知事は汪師爺に治水工事を行わせた。汪は溪流の上流にある快官庄の地形を調べた末、二つの庄が共有する新しい水路を作ろうとするが、快官庄の猛反対にあう。そこで汪師爺は地域の秀才と相談して、金持ちの行商人に扮して、快官庄の盗賊に自らを襲わせる。この事件の責任を問われた快官庄の村人たちは、自分たちの村に用水路を掘らせる代わりにおとがめを免れることとなり、新しい用水路は無事完成する。この話に見える、「清朝の時代はすべての土地が皇帝に属していたとはいえ、役人といえども権威に任せて人々の財産を開発するような酷なことはあえてしなかった。」という語りは、現・統治体制(日本)批判ともうがつつ事のできる表現であろう。この話でも最後に、汪師爺の位牌が祭られている場所が書き添えられ、故事の実証性が高められている。民衆の心情を汲みながら全体

利益のために行った治水工事の話によって、植民地当局主導の嘉南大圳工事が風刺されているのかもしれない。

(b-5)「郭公侯抗租」は、悪政を行い課税を強いる県知事に、農民たちが地主の郭公侯の知恵を借りて訴えを起こし成功するが、郭公侯は煽動罪に問われたため、大陸にのがれて台湾の実情を朝廷に直訴し、悪代官の処罰を成功させるという話である。台湾の地主が自らを犠牲にして大陸の権力を借りつつ、台湾の農民たちを救うという物語から、地主と小作という階級性を超えて、台湾の支配者に対抗しようとする意識が読み取れる。

(b-6)「壽至公堂」は、県知事の凌大老は台湾着任時に、地域の勢力家である武将・林有田に挨拶に行かなかったため、恨みをかって、自分の父親を鞭打たれてしまう。その後、凌大老は、民衆の敵でもある林有田を公堂（法廷）におびき出して成敗する。ところが、この事件に憤慨した林一族が違法な殺人として省城へ提訴したため、凌大老は自らの側も闘いにより痛手を受けたという理由を作って、裁判を終結させるという話である。話のところどころには林家一族の勢力抗争史も記されている。この故事は、実在の人物である林有田をはじめ、林一族が傍若無人に勢力を築き上げ、その後も放蕩のかぎりをつくした様子が描写されている。(b-2)「善訟的人的故事」とこの故事の根本的に異なる点は、悪役である登場人物の人名を明記したところにある。そのためか、『民文集』出版時に、林氏の末裔が掲載に難色を示すという事態が発生し、第一版が刷られたあとで、この故事のみ『民文集』から切り取られるという措置がとられた。ここから、台湾の故事であることを保証することは重要だが、実在する人物の一族の名誉に関わるセンシティブな問題を記録することに対して、採集者の見解が定まっていなかったことがうかがわれよう。

以上、カテゴリー (b) からは、台湾を起点に歴史を語ろうとする意識、台湾という地域の独自性の強調、義人伝を借りた婉曲的植民地体制批判、民衆理解や台湾文化の多様性、さらには台湾の物語の構築に付随して生じる、台湾内部の人間に関わる歴史記述をめぐる微妙な問題をも確認することができた。

(c)「台湾の風俗・信仰」 一習俗の肯定と体制批判

風水・霊魂・起源神話といった、台湾人が伝統的に重んじてきた風俗や信仰に関わるものが6篇認められる。

(c-1)「美人照鏡」は、地方紳士で政府と交流のある鄭秀才が、民衆の信仰のメッカである南瑤宮媽祖廟の前で、大邸宅の建設を強行したため、信仰心の深い民衆は風水が壊れることを恐れ、媽祖が北港に進香へ行く機会に乗じて邸宅を焼きうちするという話。前書きとして、この故事は神と人間の無意味な「地理」争奪戦のようだが、役人と結託して民衆を苦しめる地方の有力者に怒った民衆が、神の力を借りて暴動を起こした話であると記されている。さらに末尾でも、これは原始的多神教の「迷信」を信じる民衆の野蛮な惨劇と括られている。しかし、ここではむしろ、神を信じて暴動を起こす野蛮な民衆の姿によって、役人と通じ民衆を欺く抑圧者への反抗が表されており、それは現体制批判に連なる暗喩ととれなくもない。また、ここでは20年代以来、新知識人が攻撃の対象としてきた民間の信仰（「迷信」）は、必ずしも否定的にばかり描かれていないことも補足しておきたい。

(c-2)「林半仙」は、清廉で貧しい人の味方である風水師・林半仙が、ある時、貧乏な男に懇願され彼を金持ちにしてやる。しかし男が恩をあだで返す裏切り行為をはたらいたため、林半仙は男を見限り、その一族は没落したという話である。ここでは、風水に関する「老婆顕勝」(財を為す良い地形の意か)、「金面盆穴」(洗面器形の地形の意か)といった語がみられ、大陸から雲に乗り渡ってきた林半仙により、台湾にも非常に優れた風水が存在することが「発見」されている。また故事を通じて台湾を代表する習俗の儀式を垣間見ることができる。

(c-3)「葫蘆墩」では、白馬や大兎というお金の神様の住む葫蘆墩(現:豊原)は、頻発する火災によって、却って街の繁栄が促されるという風水の優れた地域であった。ところが街の拡充により「明治三十二、三年ごろ」に地理が壊され、それ以降は地域の商売や生活も振るわなくなったという話である。この話にも「葫蘆墩」という丘がまだ現存していることが示されている。動物神話的な要素を盛り込みながら、風水に関わる「昔」と「今」の地域の状況が対比されており、これも婉曲的な現体制批判と捉えられよう。

(c-4)「媽祖的廢親」は、輿入れの途中で羊のお産を目の当たりにした台湾の航海の女神・媽祖が、保正大帝との結婚を破談にしたため、二人の間には諍いが生じたという話である。出産のリアルな情景や、それをみて怖がる媽祖、また嫉妬する保正大帝など、人間的感情が加味され、台湾でもっとも人々に近い神様である媽祖への親近感が表現されると同時に、台湾の民間信仰の対象である二神の不仲の起源についての再確認が行われていると考える。

(c-5)「過年縁起」は、昔の人々は靈魂崇拜の考えによって、冬至にあらゆるものを供養したが、ひとり忘れられた灯の神が怒って人類を滅亡させようとする。以来、灯の神を敬う風習ができたという話である。末尾に「領台以前にはまだこうした風俗があった」との一言が添えられ、台湾習俗を消滅させたものに対する批判が認められる。(c-3)、(c-5)の末尾にあるこうした記述は、東方による「台湾習俗」の採録故事には見られない。

(c-6)「林投姉」は、民間に流布した幽霊の復讐譚である。一人の台湾女が大陸から来た兵士と家庭を持つが、あるとき突然、夫が子どもを連れて大陸に帰ってしまう。女は悲しみのあまり林投(マダン)の木で首吊り自殺をする。女の夫と交代で赴任してきた一人の義侠心に厚い兵士が、林投の林に幽霊がでるといふ噂をききつけて、その正体を見破りに幽霊に会いに行く。そこで幽霊となった林投女の話聞いて同情し、任務が終わると彼女とともに大陸に渡り、夫に復讐し死に至らしめるという話である。『民文集』の序において李獻璋は、「[林投姉]の伝説は、荒唐無稽で一顧に値しないと思われるが、じつはこれは人が死んだ後、幽霊になり冥界に存在し、さまざまな物に憑くことができ、しかもこの世の権利や義務を遂行できる、と信じられている社会において生じる考え方であって、決して事実無根のものではないことが分かる」と述べ、靈魂の存在の民間における重要性や、それを踏まえた物語内容の因果関係の正当性を説明している。ここから、靈魂を「迷信」として簡単に退けず、台湾の重要な民衆文化として受け入れる、30年代の新知識人の柔軟かつ成熟した「迷信」に対する理解の一端が見て取れよう。

以上、カテゴリー(c)からは、信仰・風水・靈魂といった習俗を扱う故事を通じて、それらの習俗が存在した「昔」と消滅した(しつつある)「今」の対比が、相当程度意識的に行われて

いることが確認できる。同時に、こうした台湾風俗に対する肯定的な記述も認められるのである。

(d) 「台湾人の特性」——台湾人の知恵、倫理、道徳観念の再認識と修正

最後に、誠実・親切・愚鈍・怠惰といった人間の性質に関わる説話が 6 篇集められていることを指摘したい⁵⁶。

(d-1) 「一日平海山」は、働きもせず窃盗などを行い人々から軽視されてきた怠け者の男が、夢のお告げに従って兵士になり出世してゆき、海賊の蔡牽をも撃退して、皇帝から提督の地位を与えられ、故郷に錦を飾るという話である。また、(d-4) 「張得寶的到富奇談」は、易者の言に従って泉州から台湾にやって来た勤勉だが運のない男が成功する話である。男は行商の航海の途中で海賊の蔡牽に捕まるが、蔡牽の遠縁にあたるのが分かって逆に優遇され、行商で巨額の富を得る。この二話のように、最初は愚かであったり、うだつがあがらない主人公が、数々の経験をへて成長してゆく話（マックス・リュティの言う「人生の上向きの履歴書」型⁵⁷）が認められる。しかしながらこうした「成功型」の話だけが『民文集』に採録されているわけではないことも注意すべきだろう。例えば、(d-2) 「無錢打和尚」のような、愚かなあまり遺言を本来の意味と正反対に取り違え、親から譲り受けた財産を次々と失う男の話、また (d-6) 「陳大鱷」のような、愚かなために牛の喧嘩の仲裁に入って命を落とす話など、笑話として捉えられる故事も含まれている。ここには「愚か」さがどのような禍を招くかを知らしめる訓話的要素も認められるのである。

さらに、世に秀でた悪知恵が主人公となった (d-3)、(d-5) の二話も収められている。特に (d-3) 「愍光義」の前書きには、泉州伝来の (d-5) 「邱妄舎」に比べて、この故事こそ台湾土着の滑稽を表す物語だと述べられている。また、奔放な気質の主人公は、しきたりを重んじる旧社会からは「愍」（愚か者の意）と呼ばれ軽視されてきたとも書かれている。ここには、台湾人の倫理道徳（不道徳）・知恵・ユーモアといった、いわば台湾人の特性について、旧来の価値観を再確認しようとする意識が確かめられる。この話には、主人公は貧しい人には同情的であったこと、科挙受験のために大陸に渡った主人公が、解元の若者から「文字のない台湾」と蔑まれたことに腹を立てて、相手を殴って窮地に陥り、最後に同郷の受験者たちと知恵を絞って難を乗り切ったことが語られる。こうしたところにも、台湾出身者の団結や自尊心が見て取れよう。他方、(d-5) 「邱妄舎」は、前書きに、魚の妖怪の血を浴びた女から生まれた（主人公の）「妄舎」は生来とても賢く、六歳の時に書房に入り勉強し、十二歳にはすでに経史に精通していた。しかし〔略〕人をからかうのが好きだったので、多くのおもしろい話を残した。〔略〕いま、集めることのできた邱妄舎の事跡を、断片的に組み合わせると、以下ようになる。」と記されている⁵⁸。ただし、『台湾新民報』版や『第一線』版と較べると、『民文集』所収の話の数が増加しているにも関わらず、『第一線』に収録されたような性を悪戯につかう極端な話がなくなっていることが分かる⁵⁹。ここには、『民文集』を啓蒙のテキストとして捉え⁶⁰、文化創造に相応しい健全さが配慮された跡を見ることもできるだろう。

以上、カテゴリー (d) から、人間の性質に関する故事が収録されながら、必ずしも善良な話だけが選択されていないことが確かめられる。それは、台湾人の「知恵」を一面的に捉えていないことの現われだろう。他方、邱妄舎の活躍する故事が、伝承されるままに記録されているわけ

ではないところから、台湾人の「知恵」に対しても、台湾文化再創造にとって相応しい内容が選択されたものと考えられる。

(2) 故事篇の全体的特徴

故事分類から文化創造の方向性を確認したところで、次に故事篇全体の特徴を見てみたい。

2.1 故事の内的時間

歴史上の人物や台湾の義人をあつかった故事を中心として、およそ半数の故事において、故事内容の内的時間が日本の領台以前と分かるように明記されたり、叙述内容から容易に推測できる点が指摘される。ここから、台湾の民間故事（民間文化）の起源を意識的に描こうとしていることが理解できよう。

2.2 台湾語の使用

「鴨母王」には、例えば、「全攻鹿耳門」や「鯽仔魚要吃着芦藤水」といった俗語が用いられている。「全攻鹿耳門」には、『現在臺南地方還留傳這一句俗語、「全攻鹿耳門」(Lakge mng) 就是這個來歷。』(「現在台南地方にまだ残る俗語「全攻鹿耳門」とはここからきている)」という説明が加えられ、台湾の俗語の歴史的由来が明示されている⁶¹。「鯽仔魚要吃着芦藤水」には意味の説明はないが、「正如俗語說的：嚟鯽仔魚要吃着芦藤水」般地、那些老百姓都慌々忙々忙忙拔起脚腿抱頭鼠竄了。」(「俗語に言う「鯽仔魚要吃着芦藤水」のように、それらの人々は慌てふためいて逃げて行った」とのように用いられており、この俗語が慌てて逃げる人々の様子を生き生きと表現し得ることが示されている⁶²。

2.3 民間伝承の叙述以外の要素

一般に口承文芸では、平易で抽象的な叙述、平面的描写が用いられることが多い。しかし「鴨母王」には、それとは異なるアヒルたちが泳ぐ河の水面の繊細な情景描写が見られる。また、「郭公侯抗租」では、民衆に城を取り囲まれた県知事の滑稽なあわてぶりや、内心の焦燥感などが豊かに表されている。これらには記録者である朱峰によって、詳細な情景や具体的な内面描写を特徴とする小説叙述の方法がとられたものと考えられる⁶³。

また、「壽至公堂」の叙述は、凌知事が林有田を討つまでの話に、林氏一族の歴史が挟み込まれる構造になっており、時系列的にストーリーが展開されない。そのため、他の故事にくらべると非常に読みにくいという特徴がある。頼和は序において「同じ地域でも人によって話は異なる。守愚氏によれば、これ〔「壽至公堂」：論者注〕は既に第五稿目ということだ。この物語のために、十数人のご老人の話を拝聴したが、断片しか分からないというだけでなく、それぞれ言うことが異なるために、これらの材料収集は大変骨が折れ、伝説は比較的普遍的なものの記録にとどめた」と述べているが、そうした採集の困難が叙述に現われているのかもしれない。

さらに、「林投姉」の叙述と、東方が「台湾習俗」収録した故事や白字劇⁶⁴とを比較すると、『民文集』収録された話は、「台湾習俗」の白字劇の内容に近いことが確認できる。ここから、採集の際に、口承文芸のみならず民間の白字劇が参照された可能性も考えられよう。

2.4 大陸とのつながり

「賣鹽順仔」「善訟的人的故事」「郭公侯抗租」「壽至公堂」「林半仙」「一日平海山」「張得寶的到富奇談」「愍光義」などに明らかであるが、これらの故事にでてくる登場人物たちは、訴訟・科挙という目的のため、また風水や夢を契機として、台湾と大陸の兩岸を比較的自由に行き来している。ほとんどの故事が清代という時代設定であることから、物語としては自然である。しかし、大陸を描くことが厳格に制約されつつあったと考えられる『民文集』出版時期（36年）の状況を念頭に置けば、自らの手で台湾の歴史を書くことが困難な新知識人にとって、故事や民話という形態こそ、歴史を書き留めることができる手段であり、台湾と大陸との深いつながりを表すことのできる方法だったと推測する。そのなかで、例えば「愍光義」において、台湾土着の話と前書きされたり、台湾人の意地（プライド）が大陸の地で発揮されたり、また台湾人の団結場面が描かれているところに、採集者（朱峰）による台湾の主体性を打ち出そうとする意識を読み取ることができるだろう。

ここまでの故事分類と全体的特徴の考察で述べてきた通り、『民文集』に収録された23篇の故事からは、台湾を中心とした英雄像の形成、台湾習俗の肯定と植民地体制批判、台湾人の「知恵」に対する認識や啓蒙の意識が表現され、また民間文化の起源、台湾語の使用、叙述の工夫、大陸とのつながり、そして台湾の独自性というように、文化創造に不可欠な複数の要素や方向性が読み取れることが分かった。大きな制約下でありつつも、民間故事の形態を借りた30年代台湾新知識人による文化創造は、このように多様で巧みな方法によって実践されようとしていたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『民文集』収録故事の分類と検討を通じて、30年代台湾新知識人による文化創造のあり方を考察した。

まず、『民文集』編纂の意図と評価を整理したところ、純粋に民間故事保存の立場、学術的保存を重視する立場、民衆啓蒙活動の立場、文芸大衆化の立場など様々な相違が確認された。また、それが採集記録方法の上の矛盾としても現れていることが確かめられた。さらに、そこには台頭する日本語・日本文化に対する危機感や、日本人による民間文学保存活動への対抗という背景がある可能性も指摘した。

次に、『民文集』に収められた23篇の故事を、ストーリーの傾向に基づき分類し、特徴を考察した。その結果、30年代の新知識人たちが実践しようとしていた多様な文化創造の方向性が認められた。彼らの採集記録方法は決して足並みの揃ったものではなかったが、それぞれの故事には、台湾の新たな文化を創造し、台湾の歴史を台湾人自らの手で記述しようとする、戦略的かつ政治的な意識が働いていたものとする。

『民文集』故事篇の時代の意義とは、言語的、文化的に日本優勢の植民地台湾において、大陸の事業を参照しながら、世界の各民族に匹敵する台湾の民間文化資源を保存採集することであり、「民間故事」という形態を借りて、台湾独自の文化を様々に創造実践することだったと言えるだろう。

〔付記〕

本稿は、「日本台湾学会第12回大会」（於北海道大学）ならびに「第九屆國際青年學者漢學會議—台灣文學與文化研究」（於台灣大學）における報告に、その後の調査から得た知見を加え修正したものである。両報告において、先生方より、数々の貴重なご意見を賜りました。記して深くお礼申し上げます。

注

- 1 初版は、6月10日印刷、13日発行。発行人は台湾文芸協会の王詩琅。印刷所は名星堂周阿財。総販売所は台湾新文学社。初版において「寿至公堂」は切り取られた（2010年4月故李猷璋邸にて筆者確認）。なお、『楊守愚日記』（許俊雅・楊洽人編『鉅溪文学第六輯——彰化県作家作品集①』彰化県立文化中心、1998年、30頁）には、6月15日の時点で王詩琅が『民文集』検閲通過の旨を書簡にて報せたとある。その後、同年12月21日に正式に発売されたとされる。王美恵『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践—以《台湾民間文学集》為考察中心』成功大学歴史研究所博士論文、2008年、31頁）、陳淑容『一九三〇年代郷土文学、台湾話文論争及其余波』（台南市立図書館、2004年、309頁）にも、各々『民文集』出版の時期をめぐる見解がみられる。
- 2 例えば、松永正義「郷土文学論争（一九三〇～三二）について」（『一橋論叢』101巻3号、1989年、『台湾文学のおもしろさ』研文出版、2006年所収）。黄琪春著・澤井律之訳「社会主義思想の影響下における郷土文学論争と台湾語文運動」（『よみがえる台湾文学』東方書店、1995年）。
- 3 梁明雄『日抛時期台湾新文学運動研究』（文史哲出版社、2000年）、218 - 229頁。陳淑容、前掲書、308頁。
- 4 「頼和及其同時代作家—日抛時期台湾文学国際学術會議」（清華大学中文系主催、1994年）にて発表。のち同著者『民間文学的理論與實際』（国立清華大学出版社、2004年）所収。
- 5 『民間文学與作家文学研討会論文集』（清華大学中国文学系主催會議論文集、1998年）、『台湾民間文学学術研討会暨說唱傳承表演論文集』（国家台湾文学館、2004年）等参照。
- 6 王美恵、前掲書。
- 7 国立成功大学中国文学系博士論文、2008年。
- 8 泰山文物社は李猷璋が自ら設立した出版社。
- 9 その他に、李柏如作「李猷璋著作目録」（『思い出すまに』所収、199 - 214頁）、王美恵「李猷璋著作目録（1930 - 1940）」（前掲論文、289、292、293頁）、李猷璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社、1979年）、『長崎唐人の研究』（和親文庫、1991年）、および李楊玲秋夫人へのインタビュー（2010年4月筆者実施）に拠る。
- 10 台南の新聞社。
- 11 呉三連台湾史料中心において該雑誌の所蔵が確認される。
- 12 『楊守愚日記』、前掲書、45、51頁。実際には『民文集』収録分の他にも故事が採集され、続編の刊行が予定されていたという（『思い出すまに』、前掲書）、21頁。
- 13 台北宮前町（現：中山区）にあった。
- 14 早稲田大学在籍時の身分については現時点で更なる調査が俟たれる。
- 15 華僑生活社、1962年6月 - 1964年6月？。
- 16 戦後台湾で創刊された『中華日報』とは無関係である。
- 17 『華僑生活』第三巻夏季号、1964年6月、14頁。「渋谷事件」は1946年7月に起きた、暴力団と結託した日本警察官と在日台湾人の闇市の取締りをめぐる衝突事件。
- 18 本節において、20年代後半から30年代中盤にかけての台湾新文学の状況をまとめるにあたり、河原功『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』（研文出版、1997年）を中心として、以下の文献を参照した。廖毓文「台湾文字改革運動史略」（『台北文物』3巻3期、4巻1期、1954年12月、1955年5月）、王育徳「文学革命の台湾に及ぼせる影響」（『日本中国学会報』第11集、1959年）、葉石濤『台湾文学史綱』（春暉出版社、1987年）、陳逸雄編訳『抗日台湾小説選』（研文出版、1988年）、松永正義「郷土文学論争（一九三〇～三二）について」（前掲論文）、黄琪春「社会主義思想の影響下における郷土文学論争と台湾語文運動」（前掲論文）、『日本統治期台湾文学文芸評論集・第五巻』（緑蔭書房、2001年）、中島利郎編『1930年代台湾郷土文学論戦—資料彙編』（春暉出版社、2003年）、陳淑容『一九三〇年代郷土文学・台湾話文論争及其余波』（前掲書）、中島利郎著『日本統治期台湾文学小事典』（緑蔭書房、2005年）。特に、郭秋生が提唱した「歌謡の整理」問題が、『南音』、『第一線』に引き継がれ、『民文集』に結実する経緯は、河原氏の指摘に拠る（河原功、前掲書）、185頁。
- 19 黄純青「台湾話改造論」（『台湾新聞』、1931年10月15日 - 28日、全14回連載）、郭秋生「建設『台湾話文』

- 一提案』（『台湾新聞』、1931年7月7日-？、全33回連載）、同著者「建設『台湾話文』一提案』（『台湾新民報』、1931年8月29日、9月7日、全2回連載。ただし、同題目で『台湾新聞』に発表された論述の続編にあたる。ここで「歌謡の整理」が唱えられた。）、負人（莊逐性）「台湾話文雑駁」（『南音』1巻1、2、3、4、7号、1932年1月1日、15日、2月1日、22日、5月25日）、頼和・郭秋生「台湾話文的新字問題」（『南音』1巻3号、1932年2月）、黄石輝「台湾話文的新字問題」（『南音』1巻3号、1932年2月）、黄純青・李猷璋「新字問題」（『南音』1巻6号、1932年4月）、郭秋生「新字問題」（『南音』1巻7号、1932年5月）、黄石輝「答負人」（『南音』1巻8号、1932年6月）、郭秋生「再聽阮一回呼声」（『南音』1巻9・10合併号、1932年7月）、同「生活改造的武器」（『南音』1巻11号、1932年9月）。
- 20 松永氏はこれを台湾新文学が大陸における文学運動から離れて独自の課題を意識し、台湾におけるナショナリズムの重層的形成の始まりを示す最初の論争と位置づける（松永正義、前掲書）、134頁。
- 21 黄石輝「怎樣不提唱郷土文学」（『伍人報』9-11号、1930年8月16日-9月1日）、同「再談郷土文学」（『台湾新聞』、1931年7月24日-？、全9回連載）。
- 22 郭秋生「建設台湾白話文一提案」、前掲資料。
- 23 林克夫「『郷土文学』的檢討—讀黄石輝君的高論」（『台湾新民報』第377号、1931年8月15日）、朱点人「檢討「再談郷土文学」」（『台湾新聞』、1931年8月20日-？）、同「檢一檢「郷土文学」」（『昭和新聞』、1931年8月22日、29日、9月12日？、全3回連載）。
- 24 蔡惠如、前掲論文、45-59頁。
- 25 蔡氏は最も早い台湾の故事採集は頼和「我們地方的故事」（『南音』1巻3号、1932年2月）であるとする（蔡惠如、前掲論文）、285頁。
- 26 『台湾新民報』第345号、1931年1月1日。
- 27 徐新建『民歌與国学—民国早期『歌謡運動』的回顧與思考』（四川出版集團巴蜀書社、2006年）、32、33頁。
- 28 「卷頭言：民間文学的認識」（『第一線』、1935年1月）。
- 29 「伝説的取材及其描写的諸問題」（『第一線』、1935年1月）。
- 30 「讀「第一線」小感」（『台湾文芸』2巻2号、1935年2月）。
- 31 『楊守愚日記』、前掲書、15頁。廖漢臣「台湾文芸協會的回憶」（『台北文物』3巻2期、1954年8月）。
- 32 「民間文学の整理及びその方法論」（『台湾文芸』2巻7号、1935年7月）。
- 33 陳氏は「方言研究熱」とは、郷土文学論争・台湾話文論争の後に提出された李猷璋「方言談屑—台湾方言研究的防備録之二」（『台湾文芸』2巻2号、1935年2月）や郭一舟（明昆）「北京話」（『台湾文芸』2巻5号、1935年5月）、同著者「福佬語」（『台湾文芸』2巻6、10号、1935年6、9月、3巻4・5合併号、1936年4月）などを指すとする（陳淑容、前掲書）、310頁。
- 34 本論は『民文集』の故事篇を考察対象としている。ただし、『台湾民間文学集』出版当時の、編者李猷璋による台湾語書面語化の意識は、同書の凡例にも窺うことができる。例えば「若」と「那」／「偌」と「才」など、これまで粗略にされていた文字表記を統一したこと、「濟」（多い）、「來」（〜と）、「咎」（湿る）、「佚陶」（散歩）、「偌爾（こんなに）などの文字表記を意味の混同を防ぐため確定したことが記されている。また新字として「勿」は「勿」と「會」の二字を併せて造り、「不會」の発音と意味を取ったこと、さらに読音を確定した字もあれば未確定の字もあることも記されている。ここに、台湾語書面語化の実践に対する意識が読み取れよう。なお、どのような幅のある台湾語で故事が記されたかは検討課題としたい。
- 35 王氏は、李猷璋を、頼和らに代表される民族主義者の「本土」論と、張深切らに代表されるプロレタリア左翼派の「啓蒙」論の両方を併せ持つ人物だと指摘する。（王美恵、前掲論文）、92、93頁。
- 36 醒民、前掲資料。
- 37 同時代の日本人知識人の評を以下に示す。平山勲は「歴史小説への待望の抜粋—「敗北の理論」第三章」（『台湾文芸』3巻2号、1936年1月）において、「歴史小説」創作を推進するため、『民文集』には起爆剤になってほしいと述べ、現実を小説的に究明することが「現代を批判する」鍵となり、台湾の生活に光明をあたえることになると述べる。ここでは、消滅しつつある民族文化保存の意識は見出せず、現代批判の道具としてのみ『民文集』が捉えられている。民俗学者の金岡丈夫は「李猷璋『台湾民間文学集』」（『民族学研究』3巻3号、1937年7月）において、日本の民族学界に『民文集』を宣伝し「著者及びその周囲の人々が、中央学界と連結し、歩調を合わせて活躍される機運を作」りたいとして、「著者がその全篇に発音記号をも加え、大意を付してこれを中央に問うならば、台湾だけでなく「昭和の日本民族学界」に大きく貢献すると述べる。ここには、消え行く台湾民俗を保存すべきとの訴えはあるが、基本的には台湾の文化を日本の版図に組み込む論調だろう。このように、日本人の評からは台湾知識人たちに見られるような台湾の民族文化を創造しようとする意識は認められないことが分かる。

- 38 こうした認識は、民衆文学には「民衆のための文学」しかないと言った朱自清の民間文学理解に通じるものがあるだろう。(朱自清「民衆文学的討論」『朱自清文集』第1巻、開明書店、1953年、62-70頁)。
- 39 「(バクレイ博士の面影) 其の他」(『台湾新文学』2巻4号、1937年5月)。
- 40 葉栄鐘『台湾民間文学集』可以給予高評価(『葉栄鐘早年文集』晨星、2002年3月所収、中国語訳：葉笛)によれば、原文は『大阪朝日新聞』台湾版(1937年2月28日)に掲載されたこととある。しかし同誌の復刻版(ゆまに書房、2007-2009年)には収録されず、当該年のマイクロフィルム(朝日新聞大阪本社)の存在が確認できない。よって暫時、中国語訳に拠り記すこととしたい。
- 41 「台湾文学運動の現況」(『文学案内』1巻5号、1935年11月)。彭小妍主編『楊逵全集』第9巻・詩文巻(上)(国立文化資産保存研究中心籌備処、1998年、388-389頁)所収。
- 42 蔡氏は当時の故事整理研究は試みの段階であったと指摘する。(蔡惠如、前掲論文)、202頁。
- 43 農村の悲惨な現状を写實的に描く「漢文創作特集」が組まれた『台湾新文学』1巻10号(1936年12月)は発禁となった。河原功「一九三七年の台湾文化・台湾新文学状況——新聞漢文欄禁止と中文創作禁止をめぐる諸問題」(『成蹊論叢』40号、2003年3月)に詳しい。
- 44 民間故事分類の世界的基準である「AT分類方式」を採用して民間故事を類別した、胡萬川『台湾民間故事類型』(里仁書局、2008年)には、『民文集』収録故事中、「愍光義」「邱妄舎」「陳大鱧」「林投姉」の四篇のみが分類されている。ここから逆に、『民文集』に収録された他の19篇の故事が、既存の分類の基準に当てはまりにくいことが証明されているだろう。
- 45 分類に際して依拠したテキストは、李献璋編『台湾民間文学集』(復刻版、龍文出版社股份有限公司、2006年)。なお、複数のカテゴリーに跨る故事もあるが、内容の特徴を第一に考え分類した。東方孝義は『台湾習俗』(同人研究会、1942年10月、111、181頁)において、「詩、詞、歌、賦は主として文學を解する讀書人階級に限られて居るに對し、一般大衆の所謂民間文學として最も普遍的なのは歌謡や故事である。」「民間文學は繁雜で、廣汎で中々分類は難しいが、大體歌謡と故事と唱本とに分つことが出来ると思ふ。」と述べる。
- 46 初出の詳細は次の通り。「鴨母王」(『台湾新文学』1巻第3号、1936年4月)。「鄭國姓打台灣」(採集者：黃瓊華、原題名：「鶯歌庄の伝説」『第一線』、1935年1月)。「過年縁起」(原題名：「過年の伝説」『第一線』、1935年1月)。「愍光義」(原題名：「鹿港愍光義」『第一線』、1935年1月)。「邱妄舎」(採集者：静香軒主人、原題名：「十二錢又帶回来了」『台湾新報』345号、1931年1月1日)。「邱妄舎」(採集者：沫兒、原題名：「邱憐舎」『第一線』、1935年1月)。「張得寶的到富奇談」(採集者：描文、原題名：「賊頭兒曾切」『第一線』、1935年1月)。「善訟的的故事」(『台湾文芸』2巻1号、1934年12月)。
- 47 台湾全島に流布する「邱妄舎」の故事を除き、南部から12篇、中部から6篇、北部から4篇の故事が集められた(王美恵、前掲論文)、41頁。
- 48 故事内容から分かる範囲で示すこととする。
- 49 共同採録者として廖毓文、楊守愚、朱点人がいる。
- 50 王氏は、朱一貴は藍鼎元『平台紀略』『清史稿』『清代通史』『清史記事本末』から連横『台湾通史』までは、清朝や大中国民族主義の観点により国賊として記述されているが、朱峰の「鴨母王」では台湾人民の立場に立ち、民衆の声を十分に反映した人物として描かれているところから、朱峰「鴨家王」には台湾を主体と考える意識が読み取れるとする。(王美恵、前掲論文)、225-227頁。
- 51 『第一線』収録の故事では、(a-5)のエピソードのうち二つのみが記録された。
- 52 この故事については、次の三つのテキストが認められる。(A) 手稿、林瑞明編『頼和手稿集・新文学巻』(財団法人頼和文教基金会・台湾省文献委員会出版、2000年)収録。(B) 前掲『台湾文芸』2巻1号掲載版。(C) 『台湾民間文学集』故事篇(1936年5月)収録版。このうち(C)が現在最も広く普及する版。さらに(C)では(B)に書かれていた、①故事の前書(「善訟」の意味について)、②彰化における「善訴の人」の紹介、③勢力者の占有地の風水に関する記述、④末尾に書かれていた「可是時代不同、事情也有些相反、現在窮苦的人可以自由去做和他身份相應的風水、有錢人可就不能了、又不僅々は五錢銀的墓地稅、一平地須納十圓的使用料。這是當然不過的事、因為為他們有錢。像這樣時代也在替以前受挑難過的窮苦人、出一點々氣。」といった記述が削除されている。
- 53 小説「蛇先生」(『台湾民報』294-296号、1930年1月1、11、18日)や、散文「我們地方的故事」(『南音』1巻3号、1932年2月)から確認できる。
- 54 小澤俊夫「マックス・リュティの様式理論」(『昔話の語法』福音館書店、1999年)221-225頁。
- 55 胡氏は、『民文集』は原住民に対する視野が欠如していると指摘する。(胡萬川、『民間文学的理論與實際』、前掲書)、211頁。
- 56 人間の徳目による内容分類は、グリム童話研究の第一人者である小澤氏も行っている。小澤俊夫『グリム童

-
- 話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』（朝日新聞社、1992年）、70-97頁。
- 57 「人生の上向きの履歴書」とは、マックス・リュティがメルヒェンの特徴の一つを説明する際に用いた言葉。メルヒェンは外側に内的なことが投影される性質があり、「変身」は内的な変化と考えられ、段階的な移行や点から点への「前進」は、発達や成長の印として考えられるという。それゆえ主人公が回り道をして、目的を間接的に達成しても、それは発達や変化する人間として捉えられるという。同氏『昔話 その美学と人間像』（岩波書店、1985年）、309頁。
- 58 胡氏は「邱妄舎」の故事を様々な故事の複合体とみなしている。（胡萬川『台湾民間故事類型』、前掲書）、202、242、247頁。
- 59 蔡氏は、民間文学故事採録時に「内容が淫猥」なものは不採用になったと指摘する。（蔡惠如、前掲論文）、215頁。
- 60 李献璋は、なぞなぞが児童の教育や子どもの思索力を鍛えるのに役立つと述べている。（李献璋「台湾謎語纂録（一）」『台湾新民報』924号、1933年9月5日）。これはなぞなぞについての発言であるが、民間文学全般に適用することも可能だろう。
- 61 同様のことが王氏によっても指摘されている。（王美恵、前掲論文）、227頁。
- 62 李献璋編『台湾民間文学集』、前掲書、故事篇：7、11頁。
- 63 その他に、蔡氏は故事の人称変化についても着目し、小説の叙事スタイルが採用されていることを指摘する。（蔡惠如、前掲論文）、220、221頁。
- 64 東方孝義、前掲書、204、325頁。

